

人類は「ニュータイプ」になれるのか

富野由悠季

(アニメーション映画監督、小説家)

テクノロジーの進歩と宇宙空間への進出、そこで勃発した戦争の中で獲得される人類の新たな可能性——「ニュータイプ」。

『機動戦士ガンダム』で描かれた、この人の革新の概念は、時空を超えた共感能力に留まらず、今なお物議を醸す。

「相互理解で争いはなくなるのか？」

「技術の拡張に翻弄される未来は？」

原作者にして総監督・富野由悠季が渾身のメッセージを放つ。

僕は出来が悪い生徒であったおかげで、勉強のレベルを超えて趣味に没頭し、中学の頃から高校一〜二年生ぐらいまでには宇宙旅行のスペシャリストになっていました。ところが、SFで扱われている宇宙旅行論と、月まで行くにはどうするかという足場があつたうえで僕の宇宙旅行論とは、まったく違っていたのです。無重力帯というのはどういうことなのか、上空何キロから宇宙で、音速を超える瞬間の人間と重力との関係はどうなるのかということ、こうした宇宙の概念についての基礎学力が頭にあつたことを『機動戦士ガンダム』(一九七九)を始めてつくづく実感しました。

特殊能力の必要性

——「ニュータイプ」の着想はどこから来たのでしょうか？

富野 『機動戦士ガンダム』の企画が立ち上がるときに、それまでのロボットアニメのような身長五〇メートル、あるいは一〇〇メートルといったサイズではなく、たとえば等身大まで小さくするにはどうしたらいいのだろうと考えました。ロボットのスケールが小さくなると、ロボットではなく、それを操る登場人物たちに特別

な能力がないと、アニメとして成立しなくなります。

そこで、SFから出てきてすっかり日常語になっていた「エスパー」という概念が必要だと考えました。しかし、エスパーは特殊能力を宿した特定の人間でしかなく、エスパーではない人とは相容れない存在になってしまう。特別な人間に宿った特別な能力としないための方便として、新しいタイプの人類、つまり「ニュータイプ」が同時発生するようなストーリーを考えました。

しかしながら、『機動戦士ガンダム』放映中は、ついに「ニュータイプ」を概念づけることはできませんでした。地球の裏側にいる人の感情まで瞬時にわかるような態度を持たせたい。だからといって、特定の人物がオカルト的な能力を持つてしまうのではなく、すべての人間がやがて持つことになる能力を先行して持つ、その喜びも苦しみも余さず描きたい、と思ったのです。

では、その力とは何か、それはつまり洞察力なんだというところまでは物語の終盤あたりでたどり着きましたが、それを劇中で表現しきることはできませんでした。一〇〇万人を超える規模の人間が、現在の人類よりも少しだけバージョンアップできたときに、その人たちを「ニ

ュータイプ」と呼ぶにふさわしい、ということころまでは規定できたのですが、それを劇中でどう表現したらいいのかがわからず、結局は特殊能力を持った戦闘者という描写になってしまった。政治家のニュータイプや、経済人のニュータイプをどう描けばいいのか、それがわからないう悔しさを三〇年以上引きずってきてしまいました。

ただ、この経験から、どんなに優れた戦闘者であっても優れた政治家にはなれない、ということまではわかりました。『機動戦士Zガンダム』(一九八五〜八六)や劇場版『機動戦士ガンダム 逆襲のシヤア』(一九八八)は、戦闘者から人類を先導する立場になりきれなかったシヤア・アズナブルとアムロ・レイの挫折の物語という側面を持っています。戦闘者、パイロット、技術者といった特性の強すぎる人たちは、僕の考えるような政治家になれるほど、多角的な視点を持ち得ないのだということが、ガンダムシリーズを重ねるうちにはつきりしてきたのです。一つの属性で際立ってしまった人は、組織を調整し、世の中を動かす役割には不適合である。それがわかったのは、シヤアとアムロのおかげだといえるのかもしれない。

——科学技術、哲学、政治、経済、軍事……、

あらゆる面で現人類を凌駕した洞察力を持つニュータイプのような人の登場は考えられますか？

富野 そういった人を仮に「全能者」と呼ぶならば、一〇〇万人に全能者になってほしいと本気で考えました。でも、全能というのは、お釈迦様とアインシュタインの脳が一緒になって一人の人間に同居している、そういうレベルの話です。

実をいうと、そんな存在も全能とはいえませんが、そうではない「愚民」に実行を命じることになってしまふ。この愚民は、あるときは身分が下層の人間であり、つい最近までは女性でもありました。飯炊きも糞尿の始末も愚民にやらせて、自分たちは科学や哲学、政治に興じてい

ればいい、というのが賢人だったわけですが、生活を除かれた賢人たちがそれぞれの専門に特化するうちに、お互いに隣の賢人が何をしているかさわからなくなつてしまつたのが今の世界で、まさに「知の愚迷」の成れの果てです。緊急事態宣言を叫んで人々を家に閉じ込め

ておこうとしてもままならず、経済が冷え切つた感染症流行下の都市のど真ん中で、世界中から最も優れた肉体を集めて祭典を行う。これ以上ないほどの愚迷を、どんな知性も止めることができなくなつているのがその証明です。

全能へ向かう者の行く末と愚民の力

——『機動戦士Zガンダム』の主人公であるカミーユ・ビダンを富野監督は「最高の能力者」と評されています。ガンダムシリーズの中でもとりわけ強く屈折した少年が、なぜ「最高の能力者」なのでしょう？

富野 もちろんカミーユも全能型とはほど遠い人間です。でも、ほんの短い期間ではありましたが、カミーユに全能を目指させようと思つたことがありました。だけど、現代の我々と大きく変わつてはいない近未来の人物に、全能を目指すだけのキャパシティはありません。結果として、カミーユの精神は崩壊しました。

カミーユ自身の意思で全能者を目指したわけではありません。少なくとも、そのような描写を劇中ではしていないはずですが、ただ、明らかに戦闘者としての能力が傑出していたために、本人の肉体的な限界を超えたものを負わされ続け